

2022 年度

国 語
(1 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号もふくみます。)

十九世紀、ドイツの経済学者・思想家のカール・マルクスは、生産手段（土地や工場、資金など）を持つ資本家が、労働者を低賃金で働かせ、利益を追求する資本主義社会の問題点を分析ぶんしきしました。その代表的な著作である『資本論』の中で、マルクスは資本主義社会では、社会の「富」が「商品」として現れることを問題にしています。以下はマルクスの『資本論』のうち、社会の「富」が「商品」となることについて説明した藤幸平とうこうへいさんの文章です。

① そもそも「富」とは何でしょうか。「富」を表す一般的な英語は *wealth* です。これは金銭や有価証券※1、不動産など、貨幣で計れる財、金額として表せる財がイメージされる言葉です。ただ、それでは、富と商品の区別がつかなくなってしまう。

なので、別のアプローチをしてみましょう。ドイツ語の原語で「富」は「ライヒトウム (Reichtum)」といいます。reich は英語の rich、日本でもカタカナ語として「リッチな」などと使いますね。これも狭義せうぎには「リッチな人」などお金持ちのイメージになりますが、味わいや香りかほが「リッチ」ともいうように、何か※2が「豊潤、潤沢じゆんたくである」(アバンダント、abundant) ことも意味します。

例えば、きれいな空気や水が潤沢じゆんたくにあること。これも社会の「富」です。緑豊かな森、誰もが思い思いに憩ひらえる公園、地域の図書館や公民館などがたくさんあることも、社会にとって大事な「富」でしょう。知識や文化・芸術も、コミュニケーション能力や職人技もそうです。貨幣では必ずしも計測できないけれども、一人ひとりが豊かに生きるために必要なものがリッチな状態。それが社会の「富」なのです。

そして、この「富」を維持いじ、発展させるのが労働です。ほかの人たちと協力し、自然に働きかけることで、人間は自分たちの能力を発展させ、また自然を自らの欲求に合わせて変容させ、富をさらに豊かなものにしてきました。ところが、こうした社会の「富」が、資本主義社会では次々と「商品」に姿を変えていく、とマルクスはいます。

これは今も私たちの身近で起こっていることです。

A、都市部の公園を更地まじにして、そこに高層マンションやショッピングモールを建てた

り、森を切り拓いてゴルフ場を造ったり。一番わかりやすいのは「水」でしょう。私が子どもの頃、飲料水は「商品」ではなく、水道からタダで飲める物でした。ペットボトルに入った水が「商品」として定着したのは、ここ二〇年くらいのことです。

このように、ありとあらゆる物を「商品」にしようとするのが、資本主義の大きな特徴の一つです。B、資本主義以前の社会にも商品はありました。しかし、その多くは交易品や贅沢品で、日常の生活に必要な物は基本的に自分たちで作ったり、みんなで集めてきたり、分け合いながら暮らしていました。お金を出して買う「商品」の領域は限られていたので、社会の富が「商品の巨大な集まり」として現れることはけっしてなかったのです。

今はどうでしょう。生活に必要な物のほぼすべてが「商品」として売られ、私たちはそれを買って日常を営んでいます。「商品」に頼らず生きることは、もはや不可能といっても過言ではありません。

巷には、魅力的な「商品」があふれています。お金を出せば何でも手に入るようになったことで、私たちの暮らしは「豊かになった」かのようにも見えます。C、まさに商品化によって社会の富が「貧しくなっている」ことを、マルクスは一貫して問題視したのです。

マルクスは、イエーナ大学で博士号を取得後、地元の「ライン新聞」で社会問題に取り組みます。一八四二年に同紙の編集長に就任し、木材盗伐についての記事を何度も書きました。

当時、ドイツの貧しい人々は、煮炊きをしたり、冬に暖をとったりするための枯れ枝を近くの森で拾い集めていました。枝は生活に不可欠の「富」だったのです。ところが、こうした行為を「窃盗」と断じる法律ができ、枝拾いをしていた人々が騎馬警官に襲われるという事件が起きたのです。

映画『マルクス・エンゲルス』の冒頭シーンにも印象的に描かれています。地面に落ちた枝さえも地主が私有財産として囲い込み、「薪木が欲しかったら金を出して買え」と迫る。そんな「商品」の論理に支配された社会を痛烈に批判したマルクスは、当局に目をつけられ、やがてパリに亡命することになりました。

X

は、簡単にいうと、値段がついて、売り物になるということです。

かつては誰もがアクセスできるコモン（みんなの共有財産）だった「富」が、資本によって独占され、貨幣を介した交換の対象、「商品」になる。

例えば飲料メーカーが、ミネラル豊富な水が湧く一帯の土地を買い占め、汲み上げた水をペットボトルに詰めて、「商品」として売ってしまふ。それまで地域の人々が共同利用していた水汲み場は立ち入り禁止となり、水を飲みたければ、スーパーやコンビニで買うほかない。これが商品化です。

もちろん、お金があれば買えますが、ない人はそれが生活にどれだけ必要であっても、もはや手に入れることができません。水は以前と変わらずこんなこと湧いているのに、お金のない人には「希少」なモノになる。資本主義は、人工的に希少性を生み出すシステムといってもいいでしょう。

一体なぜ、そんなことをするのでしょうか。

かつてコモンだった森や水は、誰もがアクセスできるという意味で「潤沢」な「富」でした。しかし、これは資本主義にとって非常に**1**。お金を出して買わなくても、生活に必要な物が手に入るなら、商品を作っても売れないからです。だから、コモンを解体して独占し、あるいは破壊くわいまでして、買わなければいけないモノ、つまり「商品」にしようとするのです。

とはいえ、人々を閉め出して森を独占したとしても、そこに生えている木を伐採し、製材しなければ「商品」になりません。「商品」にするためには「労働」^③が必要です。この労働を担ってくれるのが、森から締め出され、薪たきぎを買うためにお金を必要としている人々。資本による囲い込みは、資本にとって二重の意味で好都合でした。

かつてイギリスでは、地主や領主が非合法に農地を囲い込み、小作人を追い出して、農産物より儲かる羊の放牧地に転化するというのが盛んに行われました。マルクスの時代には、穀物増産を目的として政府が囲い込みを主導。農地を追われ、住む場所※4も糊口こくちうをしのぐ手立ても失った人々は、仕事を求めて都市になだれ込み、工場労働の担い手となっていきました。

地元に残った人々も、農作物を「商品」として生産する大規模農業経営のもとで、農業に従事する「賃労働者」に転じていきます。

農村民の一部の収奪しゆだつおよび追放は、労働者とともに、

彼らの生活手段と労働材料を産業資本のために遊離ゆうりさせるのみならず、国内市場も作り出す。

「商品」生産の担い手は、自らの労働力を提供するだけでなく、「商品」の買い手となって、資本家に市場を提供したのです。こうして、賃労働をしなければ生きていけない人が増える一方で、市場経済が回り始めると資本家や地主はどんどん潤い、資本主義は発展していきました。

(中略)

^④資本主義社会と、資本主義以外の社会の違いは何か。ここまで、その一つとして、資本主義のもとでは、ありとあらゆる物が商品化され、社会の「富」が「商品」に姿を変えていくということを見してきました。

さらにマルクスは、「商品生産が全面化された社会」——つまり、ありとあらゆる物が商品化されていく資本主義社会では、物を作る目的、すなわち労働の目的が他の社会とは大きく異なると説いています。ア

古来、人間は労働によって様々な物を作ってきました。イ

例えば、食欲を満たすために大地を耕して、穀物や野菜を作る。あるいは、風雨や寒さから身を守るために、丈夫で暖かい衣服をこしらえる。自分を美しく見せたいという欲求を満たすための装飾品、権力を誇示するための神殿、領土をもっと広げたいという王の強欲を満たす戦争も、規模は違えど、基本的な目的は同じです。いずれも「食べ物」「衣服」「広大な土地」など、特定の物と結びついた欲求です。

こうした具体的欲求を満たすために、人間は労働したり、他の人を労働させたりしてきたわけですが、そうした生産活動には、一定の限界があるものです。たくさん食べたい、もっと食べたいといっても、食べられる量には 2。いかに強欲な王も、巨大な宮殿を百も二百も欲しがったりはしない。これこそが、資本主義社会とは決定的に異なるところなのです。

アマゾンの CEO ジェフ・ベゾスは、世界一の大富豪ですが、資産が二〇〇億ドルを超えても引退する気は全然なさそうですし、かといってピラミッドを建造したいというような明確なゴールがあるわけでもなさそうです。書籍販売で成功したら次はパソコン、食品、日用品と、ただひたすら際限なく手を広げていく。ウ

なぜかという、資本主義社会では「資本を増やす」こと自体が目的になっているからです。そのメカニズムについては第2回で詳しくみていきますが、資本主義は利潤追求を止められない。会社の規模や個人資産がいかに膨張しようとも、たとえそれが巷から書店を一扫するという破壊的な帰結を社会の「富」にもたらすとしても、目先の金儲けを止められないのが資本主義なのです。エ

- ※1 有価証券：小切手や株券など。
- ※2 豊潤・潤沢ほうじゅん じゆんたく：豊かであるおいがあること。
- ※3 困い込みこま：他人が使えないようにすること。
- ※4 糊口ここうをしのぐ：貧しいながらも暮らしていくこと。

問一 — 線①「そもそも『富』とは何でしょうか」とありますが、マルクスはどのようなものが豊かにあることが、社会の「富」であると言っていますか。その答えとしてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 金銭や不動産など金額で表せるもの
- イ 一人ひとりが豊かに生きるために必要なもの
- ウ 人々が労働によって、維持、発展させてきたもの
- エ 誰もがアクセスできるコモン
- オ 地域の人々が無料で共同利用しているもの

問二 線ア～エの中でマルクスの考える「資本主義社会」の状態としてふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

問三

A

C

 に入る語句をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい（ただし、それぞれの記号は一度しか使えません）。

- ア もし
- イ しかし
- ウ だから
- エ もちろん
- オ 例えは
- カ なぜなら

問四 — 線②「木材盗伐とうぼくについての記事」とありますが、この記事でマルクスはどのような状況じょうきょうを問題としていますか。それを説明した次の文の空らんらんに、本文から指定された文字数の語句を抜き出して完成させなさい。

人々の暮らしに不可欠な森の枯れ枝が、ア 八文字から資本家のイ 四文字になり、「商品」となる状況。

問五 Xに入る文としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 国家が社会の「富」を囲い込み、独占すること
- イ 「商品」が社会の「富」として維持されるということ
- ウ マルクスの発言を国家が許さないということ
- エ 社会の「富」が「商品」に姿を変えらるということ
- オ 資本家の「富」が社会の「コモン」になるということ

問六 1 2にふさわしい文を、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|---|-----------------|------------------|-----------------|---------------------------------|
| 1 | 1 | ア 都合が悪い | イ 条件が良い | ウ 気分が良い | エ 相手が悪い |
| 2 | 2 | ア ひとそれぞれ違いがあります | イ ひとそれぞれ違いはありません | ウ どこまでも限界がありません | エ 自 <small>おの</small> ずと限りがあります |

問七 — 線③「二重の意味で好都合でした」とありますが、ここで筆者が言いたいののはどのようなことですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 資本家が資本を増やし、資本主義が発展したのは、資本家が社会の「富」である森などの土地を自らの私有財産にするだけではなく、その土地を利用していた人々を、そこから追い出すことができたからだということ。

イ 資本家が資本を増やし、資本主義が発展したのは、資本家が社会の「富」を自由に使えることが出来なくなった人々を「商品」の作り手だけではなく、その商品を買える人々にすることができたからだということ。

ウ 資本家が資本を増やし、資本主義が発展したのは、資本家が私有財産とした土地を儲けるために利用するだけでなく、その土地において穀物などを増産することができたからだということ。

エ 資本家が社会の「富」を独占し、資本主義が発展できたのは、資本家が人々から森や農地での仕事を奪っただけではなく、都市での工場労働の担い手にできたからだということ。

オ 資本家が社会の「富」を独占し、資本主義が発展できたのは、資本家が人々を「商品」の買い手とすることができただけではなく、市場経済を回すこともできたからだということ。

問八 — 線④「資本主義社会と、資本主義以外の社会の違いは何か」とありますが、本文における資本主義社会とそれ以外の社会の違いとはどのようなものですか。本文を参考にして八〇字以上一二〇字以内で答えなさい。

問九 本文には次の一文が抜けています。どこに入ればよいですか。本文の ア エ の中から選び、記号で答えなさい。

しかし、資本主義以前の労働は、基本的に「人間の欲求を満たす」ための労働だったとマルクスはいいいます。

問十 次の記号のうち、本文の内容にふさわしいものには「○」、ふさわしくないものには「×」と答えなさい。

ア 資本主義社会においては、利益の追求を第一に考えた労働者が、より高い賃金を求め都市になだれ込んだため、資本家が工場の働き手を確保するのが容易になった。

イ 資本主義社会においては、そこに住む人々にしか利用できなかった社会の「富」を、お金を出せば誰でも買える「商品」とすることで、多くの人々が利用することができるようになった。

ウ 資本主義社会においては、誰でもアクセスできた社会の「富」を資本家が独占したことによって、次第に資本家による森や農地の囲い込むことにつながっていった。

エ 資本主義社会においては、たとえ資本家が十分な資本の増加に成功したとしても、それで満足せずに、さらに資本を増やそうと社会の「富」を奪いつくしていった。

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

行列のできる近所のたいやき屋『ひらかわ』のたいやきを小学生の私(美樹)は食べたいと思っていたが、行列やおこづかいの都合でなかなか食べられずにいた。ある日店の前をうろろしていると、「ひらかわ」のお兄さんがたいやきをただでくれた。そのことが私はとても嬉しく、お兄さんに憧れを抱くようになった。

昨日と同じように、一つを歩きながら商店街で、もう一つを公園で食べた。

公園には、昨日と同じお姉さんがいた。またベンチに座ってスケッチブックを開き、絵を描いている。三月はあつたかい日と寒い日の差が激しい。今日は風が少し冷たいせいとか、口と鼻を覆うようにマフラーを巻いている。あんまり見ていたら目が合いそうになったので、あわてて目を伏せた。

たいやきを食べる途中で、あんこが指についた。もらったおてふきを出そうとしたけど、何だかもつたいない気がして、封を開けるのをやめた。公園のトイレに入り、冷たい水で手を洗う。指がじんじんとした。

顔を上げると、正面の汚れた鏡の中に、頬を赤くした私が映っていた。寒さのせいで、冬によくそうなる。「いなかの子どもみたい」って、よくクラスの友達からはからかわれるけど、うちのお母さんは「だからかわいいんじゃない」と言ってる。

鏡に向け、目を大きく開いてみる。私の顔、あのお兄さんの目に、どう見えてるだろう。

——私にだけ、くれるたいやき。

スキップしながらトイレを出て、わざと『ひらかわ』の前を一往復して帰る。さっきまで誰も並んでいなかった店の前は、いつの間にやらまた人垣ができている。なんだ、お兄さんは夕方しか行列しないって言ったけど、けっこう人気だ。私だけの秘密の楽しみが他の人にも知られてしまったように、ちょっとだけ残念に思う。

背伸びをすると、お兄さんが忙しそうに作業場とレジを行き来してるのが、顔半分と頭だけ見えた。

「お母さん、美樹に聞きたいことがあるんだけど」

夕ご飯の後、お母さんが部屋に来了。

廊下から、お父さんがテレビの野球中継を見てる音がした。何だか嫌な予感がして、私は黙ったままでいた。お母さんが後ろを向いて襖を閉める。私の目をじっと見ながら、「お母さんに隠してることはない？」と聞いた。

「隠してること？」

「今日、お掃除で美樹の部屋に入ったら、これを見つけたの」

お母さんが手にしてるものを見て「あっ」と思う。『ひらかわ』のおてふきとナプキン。お母さんは困った顔をしていた。

うっかりしていた。『ひらかわ』に通って今日で三日目。お兄さんからもらったナプキンとおてふき。机の隅に **A** 飾ってた。

「これ、どうしたの」

「もらったの」

答えるとき、声がぶれた。

「嘘じゃないよ。本当にもらったの」

信じてもらえるだろうか、こんな都合のいい話。だけど、必死に言う。何か誤解されてるんじゃないかと、気持ちがちんどん焦っていく。やましいことなんか何もないはずなのに、汗がふき出た。

三日前、急に『ひらかわ』のお兄さんから話しかけられたこと。気前よく、それから毎日たいやきをもらってること。商店街から公園まで行って、食べてること。全部本当のことだから、『ひらかわ』に聞きに行つて確かめてもらってもいいってことも伝えた。お兄さんとの二人だけの約束を破ってしまうようで、何より、楽しかったこれまでのことを自分の手でおしまいにしてしまうようで、話しながら、何度も胸が苦しくなった。

お母さんは驚いていた。でも、「まあ」と話の途中で何回か咳くだけで、黙って私の話を最後まで聞いてくれた。

「お父さんに言う？」

たまらなくなって聞く。テレビの向こうでバットがボールをかつ飛ばすカーンという音と、歓声が聞こえた。誰にも迷惑をかけていないけど、親に隠れておやつを食べていたことは、それだけで叱られる原因になりそうな気がした。お母さんならまだいいけど、お父さんが出てくるのは本格的に怒られるときだ。そうになったら、私はもう言い訳する言葉も失って、**B** 泣いてしまうだろう。

「言わないけど、お父さんも心配すると思うな」と、お母さんが言った。

「本当に『ひらかわ』さんからタダでもらったの？」

「お兄さん、本当に優しい人なんだよ。あそこの子どもなんだって」

お母さんは手の中のナプキンとおてふきを見て、しばらく考えこんでいた。やがて顔を上げ、「美樹は、サクラ、なのかもしれないわね」と言った。

急に変なことを言われてびっくりしてしまう。満開の東公園のさくらの木を想像する。

「サクラ？ 花？」

「ううん。違う、違う。他のお客さんをつれてくるために、わざとお店が用意する仕込みのお客さんのこと。嘘のお客さんって言えばいいかな。そういう人のことをね、サクラって言うの」

お母さんは言葉を考え考えしながら、「わかるかな」ってふう私を見て続ける。

「わざとおいしそうに食べて、商店街や公園にいる人たちにアピールするの。いいでしょ、ほら、あなたも食べませんか？ そこで売ってますよって。美樹だって、目の前で誰かが何か食べてたら気になるでしょ？」

「わざとおいしそうに食べたわけじゃないよ。本当においしいもん」

「わかってるよ。お母さんもあそこのたいやきは好き。でもね」

お母さんの口元が緩んだ。

「美樹がおいしそうに食べてくれることで、お店も助かるってこと。それにあそこのたいやきが焼けるのは三十分一回で、それがいつのタイミングかわからないでしょう？ 美樹が焼きたてを食べてれば、事情を知ってる人たちはもう焼けてるんだなってわかるでしょ」

「そういえば、と思い当たる。私がいやきを食べながら商店街を通るとき、みんなが私を見てたこと。公園から帰るとき、再びお店の前が行列になってたこと。」

「だけど、うまく言えないけど、そんなの嫌だった。『タダより高いものはない』ってことわざがあることは知ってる。うまい話には裏がある。世の中はそんなにうまいことできてないって言葉だった。わかってるけど、そんなふうに考えるのは、お兄さんを裏切るみたいで嫌だった。」

「明日も、『ひらかわ』に行く約束したの」

私は泣き出しそうになっていた。

「行っていいでしょ？」

お母さんが私を見つめる。間を置かずに「ダメよ」と答えた。

「今度、お母さんと一緒のときに行きましょう。タタでお店のものを何回ももらうのは、やっぱり C よくないわ」
黙ってしまふ。これ以上つつばねて、お父さんに言われたら困る。

「美樹、返事は？」

唇を結んだまま、顎を動かし、こくと頷く。お兄さんの顔がチカチカ浮かんで、涙を呑む思いがした。

キミコちゃんの家遊びに行ってくる、と嘘をついて家を出た。

私が、サクラだなんて、きつとお母さんの間違いだ。お金を払わない嘘のお客。お兄さん、お兄さん、お兄さん。

『ひらかわ』の前に行くと、明るく、楽しそうな笑い声が聞こえた。昨日までとは全然空気が違って見えた。店の前に、行列はない。私が見たいやきをもらいに行くはずなのに、店の前に立ってたのは、公園で毎日見かけていたあのお姉さんだった。今日はマフラーを結ばずに、ただ両肩からだらりと掛ける。顔を隠さず、すらりと立ってる姿はやっぱりきれいだった。

「ヒラカワくんが、はっぴ着てるなんてびっくり」と、お姉さんが言った。

「おうちのお手伝いの？　ここのお店、おいしくて人気なんでしょう？　公園に来る人、みんな食べてるもん。すごいね、偉いね。ヒラカワくん、学校の制服と違って、そうしてると本物のたいやき屋さんみたい」

「ひっでえな。本物って何だよ」

お兄さんが身を乗り出して答える。とても、とても嬉しそうに明るく。背筋をひやっと冷たいものが流れる。お兄さんの顔が、赤くなっていた。聞いたことのない言葉遣いと声の出し方をするお兄さんは、今初めて見る別人のように見えた。いつもみたいじゃない。もつとずつと子どもみたいで、大人っぽくない。私の足はすくんだように動かなかった。だけどすぐ、金縛りが解けるような一瞬がやってきた。『ひらかわ』に背を向

けて、公園の方に引き返す。聞きたいけど、聞きたくない。二人の声が追いかけてくる。耳に入ってしまう。^⑥

「だけど、本当に偶然くわんぜんだな。こんなところ見られて恥はずかしい」

「美術部の課題なの。最近は毎日、あそこの公園に通ってて。でも、こんな近くでも、ヒラカワくんが働いてるなんて、全然気づかなかった」

「ほんと？ —— だけど、ああ、そういえば、俺おれ、公園でオガワさんに似た人、見たような気がしてたんだよな。まさか、本人だとは思わなかったけど」

嘘だ！

私の心が叫び声を上げる。

お兄さんが言っていることは嘘だ。ほとんど直感のようにわかってしまう。お兄さんは **D** 知ってた。お姉さんがあそこにいること。私を公園に行かせた。たいやきを持たせて。おいしそうに食べさせて。^⑦

お兄さんが言う。明日も来てよ、オガワさん。軽い声を出すお兄さんは、もう全然かっこよくない。あの人のせいで、だいなしだ。

足がただ、前に前に、ぐんぐん出た。前につんのめるようになりながら、私はどんどん早足になる。俯うつむいて、自分のつま先だけ見つめて、先を急ぐ。

嘘だ！

もう一度叫んで顔を上げると、東公園のさくら並木が、目の前に、まるで壁かべのように一面広がっていた。サクラ。お母さんから聞いた言葉。花じゃなくて、お客さんを連れてくる、嘘のお客。

お兄さんが連れてきて欲しかったお客さん。かっこよく働いてる、偉い自分を見せたかったお客さん。^⑧

私はもう、今日からはあそこに行く必要がなくなったこと。確かめなくても、ちゃんとわかった。私は本物じゃなくて、嘘だから。足が地面を踏ふんでる感覚かんじが **E** ない。どこも痛くないのに、体の中がワンワン鳴ってる。

(辻村深月『ネオカル日和』より一部改変)

問一 A E に入る語句をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい（ただし、それぞれの記号は一度しか使えません）。

ア ようやく イ きつと ウ だんだん エ ずっと オ あんまり カ ただ キ ほとんど

問二 — 線①「汗がふき出た」とありますが、これは美樹のどのような気持ちを表していますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 『ひらかわ』に通っていることを母に怒られることで、憧れのお兄さんからもらった大事なものを捨てられてしまうかもしれないと焦る気持ち。

イ 問い詰める母に事情を説明することによって、お兄さんの自分にしてくれた優しい行動を思い出して気分が高揚し、嬉しく感じる気持ち。

ウ 『ひらかわ』に通っていることを母に知られてしまい、悪いことをしたらすぐに母に報告し、相談するべきであったと後悔している気持ち。

エ 自分は悪いことをしていないと思っているが、あまりに出来過ぎな話であるため、事情を説明しても母に信用してもらえないか不安な気持ち。

オ 母が自分のこれまでの行動を信用せずに、父の考えを聞くために父に報告したら本格的に怒られてしまうのではないかと心配する気持ち。

問三 — 線②「びっくりしてしまふ」とありますが、美樹がびっくりしたのはなぜですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今まで黙^{だま}って私の話を聞いてくれていた母が、知らない言葉を使ったから。

イ 今まで私から事情を聞いていた母が、突然^{とつぜん}関係のないことを言い出したから。

ウ しばらく私の言った内容を考えていた母が、その末に間違^{まちが}ったことを言ったから。

エ 黙^{だま}っていた母が、急に顔を上げて公園の桜の開花状況について話し出したから。

オ 私の話したことから連想^{れんさう}した母が、信じられないようなことを話したから。

問四 — 線③「タダより高いものはない」とは「高」という言葉を使った表現です。次の(1)～(5)の「高」という言葉を使った表現の意

味としてふさわしいものはどれですか。次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) 高嶺^{たかね}の花

ア 他のなによりも大事にする必要がある大切なもの。

イ ただ見ているばかりで手に取ることのできないもの。

ウ 自分ひとりでは達成することのできない困難なもの。

エ 苦勞した結果手に入れられる美しく立派なもの。

オ 厳しい自然を生き抜^ぬくことができるたくましいもの。

(2) 高みの見物

- ア 安全な立場から物事の成り行きをながめること。
- イ 上の立場の者が下の者にするような言動をとること。
- ウ 仏教的な考え方にしたがって物事を判断すること。
- エ 身分の低い者を争わせてそれを観察すること。
- オ 物事の全体について細かく見て決断をすること。

(3) 鼻が高い

- ア 出し抜いてあつと言わせること。
- イ 顔立ちなどの見た目がよいこと。
- ウ 誇ほこらしい気持ちであること。
- エ よくぞをついてしまうこと。
- オ 相手を冷たくあしらうこと。

(4) 枕まくらを高くして寝ねる

- ア 気にかかることがまったくなく、安心なこと。
- イ 問題を先送りにして、今はなにもしないこと。
- ウ 相手を軽く見て、ばかにした言動をとること。
- エ 物事を甘く見て、その結果失敗してしまうこと。
- オ 細かいところにもお金をかけるほど裕ゆふ福なこと。

(5) 敷居が高い

- ア 高級過ぎるなどの理由で気軽には行きにくいこと。
- イ 久しく会っていないことでその相手に会いにくいこと。
- ウ 人間関係がこじれるなどして孤独な状態になること。
- エ 道が険しいなどの事情でその場所に行きづらいこと。
- オ 失礼をするなどしてその場所に行きにくくなること。

問五 — 線④「きつとお母さんの間違いだ」とありますが、美樹がこのように思ったのはなぜですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 母が自分のことを気遣って注意してくれているのは理解できるが、お兄さんの優しさを疑いたくなかったから。
- イ 母の発言内容は正しそうに感じられるが、よく考えると論理に矛盾があるため、間違いだと断定できるから。
- ウ 母の言っていることはたしかにあり得そうであるが、お兄さんの行動は優しさからのものだと確信しているから。
- エ 母が言っていることの理屈は通っているが、お兄さんの私への優しさが打算からのものだと考えたくなかったから。
- オ 母は正しいことを言っているようであるが、実際のお兄さんのことを知らず、すべて想像に過ぎないから。

問六 — 線⑤ 「いつもみたいじゃない」について次の問いに答えなさい。

(1) 「いつも」のお兄さんは美樹にとってどのような人物ですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 年齢のわりに子どものようなところがある、茶目っ気のある人物。

イ 気になる人が目の前にいると緊張する、落ち着きのない人物。

ウ 丁寧な印象があり落ち着いた声で話す、大人びてかっこいい人物。

エ 『ひらかわ』に客を呼ぶために大きな声を出す、にぎやかな人物。

オ 自分よりもずっと幼い美樹を子ども扱いしない、礼儀正しい人物。

(2) お兄さんが「いつも」のようではなくなってしまったのはなぜですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美樹と話す際は特になにも意識することなく話すことができたが、同級生に働いている姿を見られたことで緊張してしまったから。

イ 美樹と話しているときはオガワさんが公園にいるのではないかと落ち着かなかったが、実際に公園にいることが分かり冷静になつたから。

ウ 美樹と話するときにはなにも気にすることなく落ち着いていたが、気になる存在であるオガワさんと話すことができ気分が高揚しているから。

エ 小学生である美樹と話すとときと違い、同級生であるオガワさんと話すときは気を遣う必要がなく、ありのままの自分で話しているから。

オ 美樹と会話するときは幼い子どもを利用して心苦しきから暗い声になっていたが、オガワさんと話すときは気にすることがないから。

問七——線⑥「二人の声が追いかけてくる」とありますが、これは美樹のどのような心情を表していますか。説明しなさい。

問八——線⑦「私を公園に行かせた」とありますが、お兄さんが美樹を公園に行かせたのはなぜですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美樹に公園でたいやきを食べさせることでオガワさんを『ひらかわ』に呼び寄せ、年下の美樹に優しくしている自分を見せてかっこいいと思わせるため。

イ 美樹においしそうにたいやきを食べさせ『ひらかわ』に来る客を増やすことで、たいやきの売り上げを伸ばしてさらに『ひらかわ』を発展させるため。

ウ 美樹にたいやきを無料で渡すことで公園に来ている人の注目を集め、オガワさんにも自分は気前のよい人間だというよいイメージを与えるため。

エ 美樹にたいやきを持たせることで、オガワさんに『ひらかわ』の存在を知らせて店に来てもらい、本当にオガワさんが公園にいるかを確認しようとしたため。

オ 美樹にたいやきを持たせて公園に行かせ、オガワさんを『ひらかわ』に来させることで、働いている自分の姿を見せてよい印象をオガワさんに持たせるため。

問九——線⑧「私は本物じゃなくて、嘘」とありますが、これは美樹がお兄さんにとってどのような存在であることを表していますか。七〇字以内で説明しなさい。

〔三〕

次の――線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- ① ビルのカンリ会社に電話をする。
- ② 選手の今後のキョシュウが気になる。
- ③ 日本コユウの動植物を保護する。
- ④ この土地に新しく高層ビルをキズく。
- ⑤ 彼の行いは言語道断だ。
- ⑥ この件については決定を社長に委ねる。

